唇に愛の華咲きほころばせ…
昼さがりの光にさえ肌を許す
背徳のおまえ――エマニエル

エマニエル夫人

〈カラー作品〉

シルビア・クリステル／アラン・キュニー／マリカ・グリーン／監督ジュスト・ジェーキン

原作 エマニエル・アルサン（二見書房刊）サントラ盤（ワーナー・レコード）フランス映画／日本ヘラルド映画

主題歌 アンヌ・アンデルセン（コロムビア・レコード）

＊あの禁断の書――エロチックな話題と興奮の渦巻く中でついに衝撃の映画化！

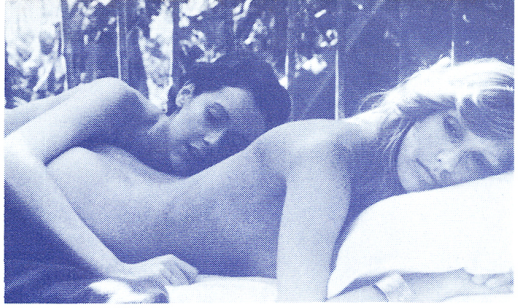
Herald

シルビア・クリステル/アラン・キュニイ/監督ジュスト・ジェーキン/日本ヘラルド映画 Herald

フランス映画/カラー作品

エマニエル夫人

Emmanuelle



*「エマニエル夫人」への招待

1974年初夏、パリ。

明るい陽光が夏の輝きを増そうとする頃。

「エマニエル夫人」がパリで封切られたのはちょうどこんな時期だったが、折からバカンスの準備に忙がしかったパリっ子たちはこの映画を観るためにバカンスの予定を少しのばさなければならなかった。

はたして予想どおり、「エマニエル夫人」は大ヒットとなった。パリ市内だけでもすでに百万人の人がこの映画を観て、いまや「エマニエルを観た?」がパリっ子たちの挨拶となってしまった。

「エマニエル夫人」――1963年に発表されたエロティック文学の傑作で原作はエマニエル・アルサンという人になっているが本当はピエール・ド・マンディアルグではないかと言われているほどの高い水準の文学。幻の小説である。

エマニエルという名の若い人妻がいる。セクシーな肢体と魅惑的な微笑、少女のように純粋な心をもっていて、その彼女が、さまざまな男性、女性と性体験を重ねていき、はかり知れない性の世界へ入っていく、それは貞淑な人妻から奔放な女への変身だったが同時に自由な女への飛翔でもあった。

映画はこんなプロセスを美しい映像で描き出す。デビット・ハミルトンふうのソフト・フォーカスの優美な画面。パリジェンヌがこの映画に馳せ参じた理由の一つがここにある。

主役のシルビア・クリステル、22才。エレガントなモデル出身。監督のジュスト・ジェーキン、34才。モード・カメラマン出身。若いスタッフによるパリのエッセンスを詰めこんだファッショナブルな映画、それが「エマニエル夫人」です。

＊　＊　＊　＊

*ストーリー

エマニエル（シルビア・クリステル）は外交官である夫の任地のバンコックへ向う飛行機の中にいた。ゆったりしたファーストクラスのシートで彼女は孤独だった。そのスキ間に入りこんできた二人の男。彼らは無言のうちに彼女と関係をもった。一人はシートの上で、一人は化粧室で。地上を遙かに離れた密室でのセックスにエマニエルは喜悦の表情を隠すことができなかった。

この大胆な性体験がきっかけになってエマニエルは大きく変わることになった。

バンコックはパリとは大きく違っている。パリを文明社会とすれば、ここはエマニエルにとって反文明の地とも映るほどである。

この地に住んでいるフランス人はかなりいた。彼らのパーティでエマニエルは何人かと知りあい、何人かと性関係を結ぶ。

アリアンヌ夫人…彼女は性的に満たされない女性でエマニエルをレズの世界へと誘う。

ビー…エマニエルが恋してしまうステキなアメリカ女性。フランス語を巧みに話し、広い心を持っていて、二人は河をさかのぼってハイキングした時に結ばれる。

マリオ……エマニエルに〝性の哲学〟を説く初老の男。彼は〝文明人のセックスというのは三人以上のセックスでなければならない。つまりそれが反文明のセックスということだ〟と主張する。

その彼によってエマニエルはバンコックのある一夜、きわめて屈辱的な性を味わうことになった。輪姦され、しかもキック・ボクシングの勝者にプレゼントとして自分の肉体を提供される。

しかしこのような体験のあと、エマニエルの表情はさわやかだった。

マリオのいう〝性の自由〟がわかりかけたのだった。

最近、僕の知っている女性たちに「エマニエル夫人」の話をしてやると、彼女たちは僕の話でみんな恍惚状態になり、瞳孔をひらき、虹彩に力をうしない、椅子から立ちあがれなくなってしまう。彼女たちは例外なく美しい話だといい、映画のふんい気が伝わってきて、登場人物たち、それぞれの情感がよく伝わってくるという。

彼女らはぜひ、その映画を見たいものだ、と、ほっと息を吐き、かすかに微笑んだりする。

虫明　亜呂無

「ロードショー」十一月号より

新春第1弾ロードショー　日比谷 みゆき座 (591) 5357